団地に
新しい動きを
おこそう！
つながりを
つくろう！

団地を元気にする
取組実践ファイル

佐伯区団地元気フォーラム
佐伯区役所

平成２７年３月

はじめに

佐伯区には、高度経済成長期を中心に造成された住宅団地が多数あり、約６万８千人が居住しています。造成時期や入居の年代に相応して高齢化等が一斉に進み、それに伴って買い物や交通手段など様々な生活課題が現れています。

一方で、住宅団地の課題を見つめ、それを何とか解決しようと、空き家を活用した新しい交流スペースづくりや、新たな組織を作って地域活動を応援する取組なども進んでいます。

こうした現状を共有し、今後の具体的な取組につなげるため、平成２６年７月に「佐伯区団地元気フォーラム」を立ち上げ、団地問題に関心のある区民の皆さんをはじめ、広く広島市内や廿日市市の団地住民の皆さんにも加わっていただいて、情報交換や現地視察等を行ってきました。

この冊子は、その活動の成果として、佐伯区の団地を中心とした意欲的な取組事例をまとめたものです。担い手づくりや買い物、高齢者の生活など９つのテーマのもとに１９の具体的な事例を紹介しています。

団地を元気にする取組が広がり、新しいつながりや活動を起こす参考にしていただければ幸いです。

佐伯区団地元気フォーラム 取組実践ファイル

CONTENTS

佐伯区団地元気フォーラムメンバーの活動

佐伯区の団地の現状　2

住宅団地を元気にする取組のステップ　4

住宅団地を元気にするテーマごとの取組実践例

活性化の推進力を強くする　6

活動の担い手や拠点をつくる　10

団地の魅力や和を強くする　18

高齢者の生活を応援する　30

移動しやすくする　38

買い物をしやすくする　40

住みやすい環境にする　44

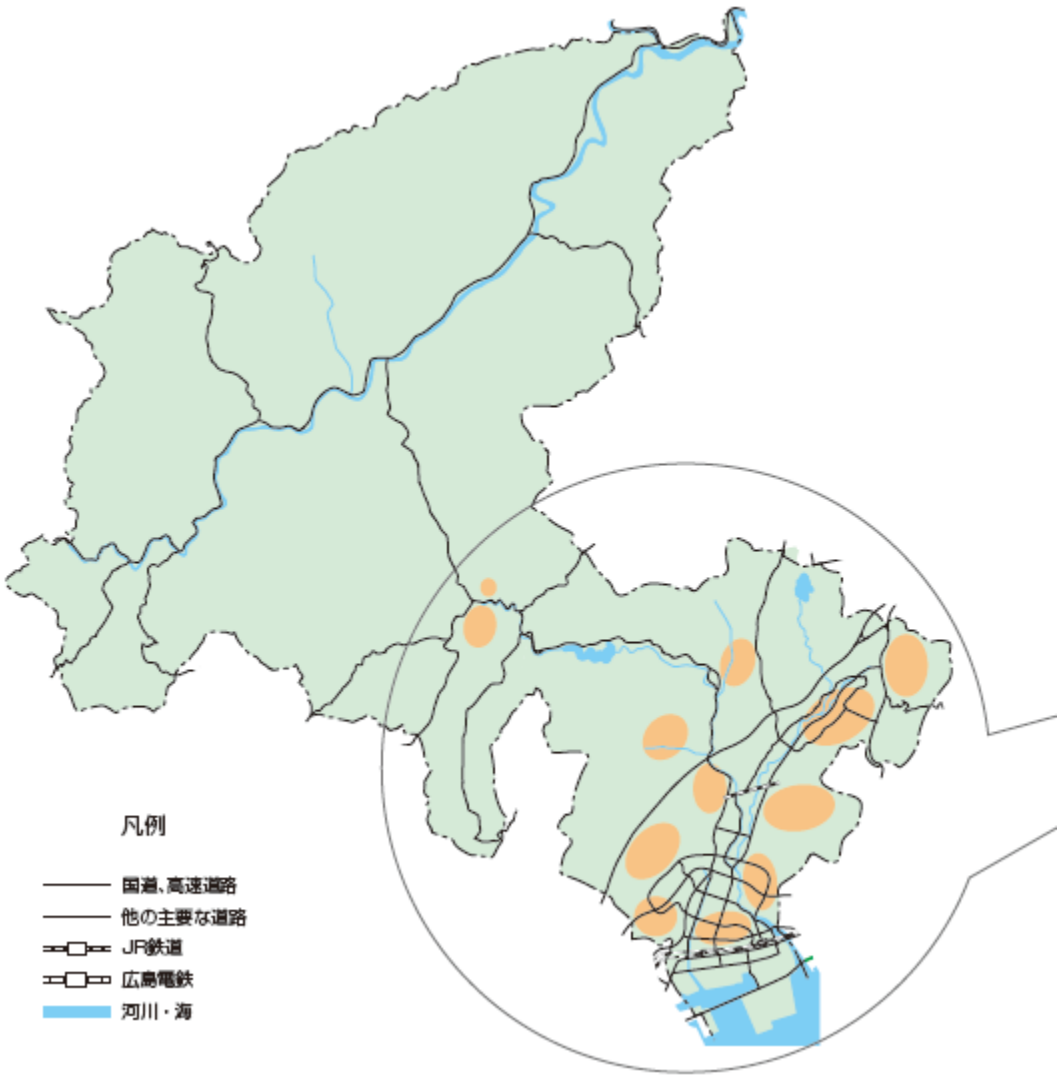
災害に備える　46

団地の将来を考える　48

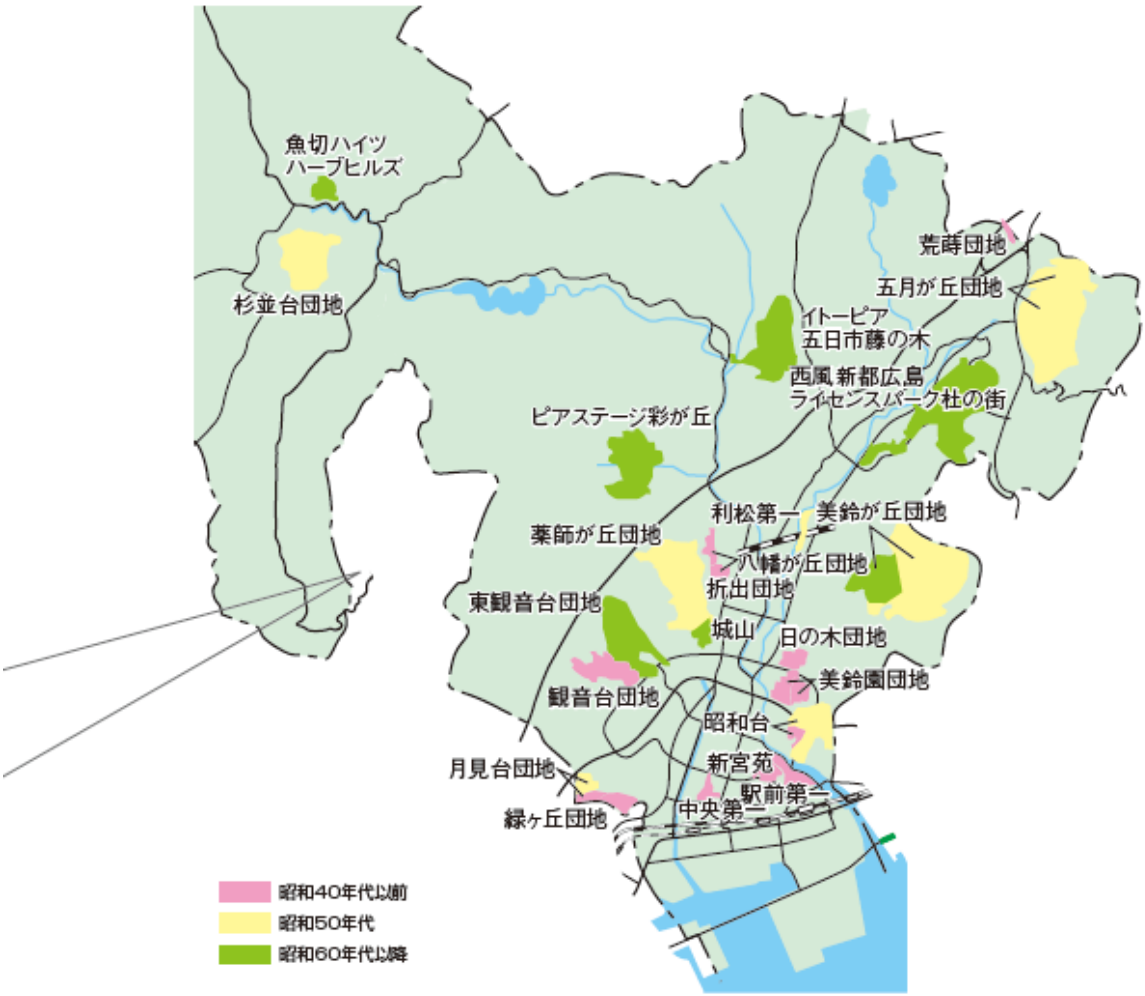
佐伯区団地元気フォーラムについて　49

佐伯区の団地の現状

佐伯区には、開発面積が５ヘクタール以上の団地が２９団地あります。
開発年別にみると、昭和４０年以前が最も多く、１３団地です。
また、高齢化率をみると、３０％を超える団地が７団地あり、開発年数が経過している団地ほど、高齢化率が高い傾向にあります。



	開発規模			高齢化率			
	中規模	大規模	計	20%未満	20%以上30%未満	30%以上	計
昭和40年代以前	13	0	13	6	3	4	13
昭和50年代	4	5	9	2	5	2	9
昭和60年代以降	2	5	7	5	1	1	7
	19	10	29	13	9	7	29



住宅団地を元気にする取組のステップ

STEP 1

住んでいる団地のことを知りましょう

STEP 2

集まって、話し合いましょう
活動を計画しましょう

STEP 3

活動を始めましょう
活動を広報しましょう

STEP 4

活動を継続しましょう

住宅団地を元気にするテーマごとの取組実践例

活性化の推進力を強くする

1 全国的にも注目の「と～かん連合会」 … 6
2 頼りになる「女子会」「男子会」 … 9

活動の担い手や拠点をつくる

3 多世代交流スペース「ら・ふぃっとHOUSE」 … 10
4 懐かしい縁側で井戸端会議「みすずいこいの部屋」 … 14
5 放課後の強い味方「ゆうやけルーム高陽」 … 16

団地の魅力や和を強くする

6 「五月が丘まるごと展示会」 … 18
7 「彩が丘トライアスロン大会」 … 22
8 気軽に立ち寄れるみんなの縁側「と～かんカフェ」 … 24
9 団地ののり面を彩る「シバザクラの花文字」 … 26
10 「五月が丘アサガオプロジェクト」 … 28

高齢者の生活を応援する

11 「みんなのイス」プロジェクト … 30
12 大学生が提案「彩が丘団地元気ベンチプロジェクト」 … 32
13 在宅介護の救世主「介護タオル」 … 34
14 「メンズサロン」と「畑でサロン」 … 36

移動しやすくする

15 「巡回乗合タクシー」の導入に向けて踏み出す … 38

買い物をしやすくする

16 移動販売車「ヒロデンジャー」を導入！ … 40

住みやすい環境にする

17 連合町内会と管理組合がタッグを組んで草刈り … 44

災害に備える

18 東北のボランティア体験を伝える「五日市高校防災訓練」 … 46

団地の将来を考える

19 町内会で独自アンケート … 48

※　佐伯区以外の団地の取組も掲載しています。
※　ひとつひとつの取組には複数のテーマにまたがる要素がありますが、ここでは、最も該当すると思われる項目に掲載しています。

❶活性化の推進力を強くする

東観音台団地

町内会活動をサポートする通称「と～かん連合会」。町内会の役員の負担を減らすことで、誰もが町内会に関わりやすくするため、祭りの企画運営や防災訓練等を引き受ける。また、自主活動としてカフェや花見会なども開いている。

「魅力のあるイベントには人が集まる」と、町内の有志が地域を盛り上げている。

●内　　容　町内会からの受託事業と自主事業
- 東観音台フェスタ
- と～かんカフェ
- 花見会など季節の行事
- 東観音台新聞の発行　等

●実 施 日　通年
●場　　所　東観音台団地内
●開始時期　平成１７年５月
●実施主体　東観音台連合会「と～かん連合会」

取組のステップ

「と～かん連合会」の立ち上げ

子ども会が解散して地域のお祭りの継続が困難になったため、町内会役員のＯＢが集まって祭りを復活させた。これをきっかけに東観音台連合会、通称「と～かん連合会」が立ち上がった。団地には３つの町内会があり、役員は１年ごとの交代制になっているものの後任を探すのに苦労していた。また、新しいことにも取り組みにくかった。と～かん連合会は、これを何とかしようと、町内会のサポートに乗り出した。

町内会受託事業と自主事業の２本柱

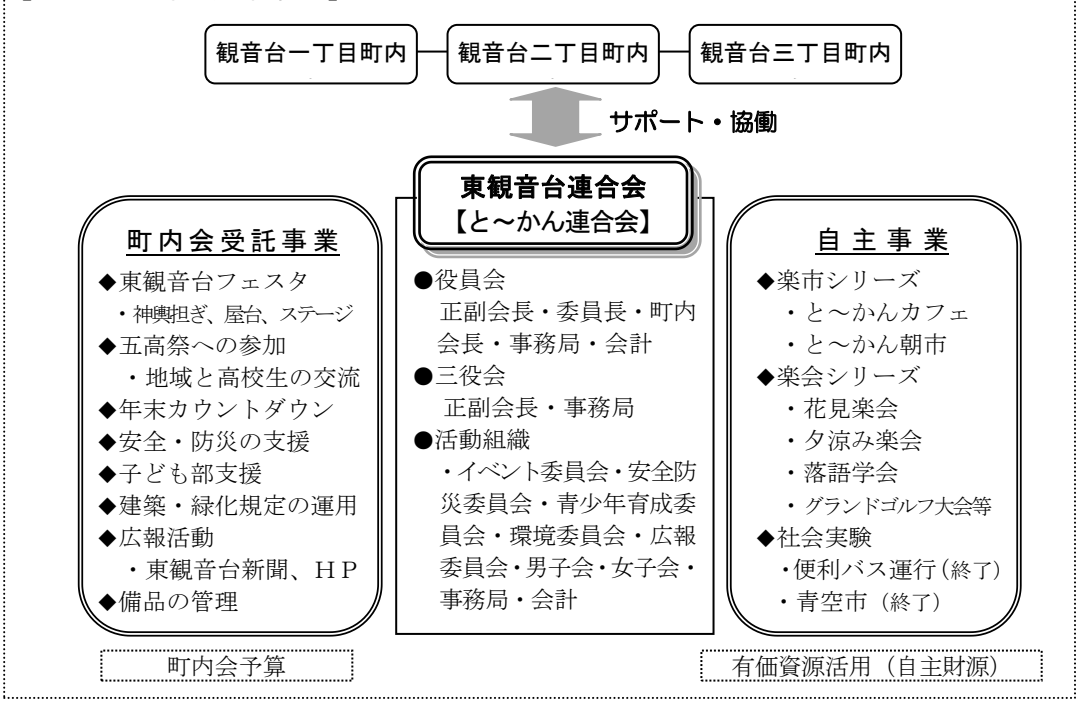
と～かん連合会が行っているのは、大きく分けて、①町内会からの受託事業、②自主事業の２つ。①は主に町内会行事のサポートで、経費は町内会の予算を充てる。毎年、町内会の総会で、事業内容と予算が決まる。

②の自主事業は、有価資源回収事業の収益金を財源に、と～かんカフェ（P24）等の新たなイベントや社会実験を行っている。

メンバーは町内会役員のＯＢが中心

会のメンバーは約４０人で町内の有志。約半数が町内会役員のＯＢで趣味や特技を生かす場にも。都合のいい時だけ参加すればいい等参加しやすい仕組みにしている。

【と～かん連合会の仕組み】



年間２０のイベントを企画、町内会の役員には負担をかけない

と～かん連合会は、東観音台フェスタや花見、夕涼みなど、月２回、年間約２０のイベントを企画・運営している。

町内会の役員には負担をかけない。連合会のメンバーは好きだからやっているので、義務感や負担感も無い。いい関係づくりができている。

団地内の高校と連携

神輿の担ぎ手が少なくなったため、団地内にある五日市高校に協力を依頼したところ、クラブの行事として参加してもらえることになり、一緒に祭りを盛り上げている。

これをきっかけに、高校の文化祭に地域も参加するなど交流を深めている。

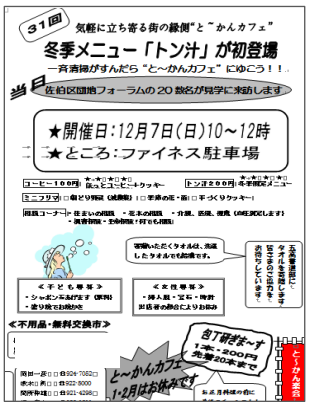
工夫していること

<u>東観音台新聞を発行</u>

地域の行事などを知らせる「東観音台新聞」を発行している。

<u>飲みニケーションを大事に</u>

打ち合わせは、参加しやすいよう行事の後に行う。缶ビール３本の飲みニケーションで自由に意見を言える雰囲気をつくる。



■ 課題・今後の展開 ■

- 団地住民の高齢化に対応した取組
- 新しい発想による活動メニューの更新

みんなの声

〈住民〉

- 地域の行事がいろいろあるので、人と話をする機会が増えた。楽しみにしている。
- 町内会役員の負担を少なくしたり、町内会行事を継続してくれる活動に感謝している。

〈主催者〉

- 定年退職して、それまで無縁だった地域の人たちと交流できてやりがいがある。
- 町内会の役員の負担が少なくなれば、誰もが町内会に関わりやすくなると思う。会の活動に参加して、地域を盛り上げていきたい。

❷活性化の推進力を強くする

東観音台団地

地域活動の担い手はリタイヤした人が多いが、ここでは、２０歳代～５０歳代の若い人達が参加して盛り上げている。自分達にも何かできることはないかと「女子会」と「男子会」を立ち上げた。これからの活動が期待される。

●内　　容　と～かん連合会の活動の盛り上げ
●開始時期　女子会：平成２４年４月、男子会：平成２６年４月
●実施主体　東観音台連合会（と～かん連合会）女子会・男子会

現役世代の「女子会・男子会」が活動を盛り上げる

団地では、町内会のサポート組織「と～かん連合会」が、町内会の行事を引き受けたり、有価資源回収事業の収益を財源にいろいろな催しを行っている。連合会のメンバーは、町内会役員のＯＢや会社を退職した人たちで年齢層が高い。

そこで、活動を盛り上げようと、連合会の中に、現役世代が中心の「女子会・男子会」が発足した。次の担い手につながっている。

いろいろなアイデアを実践する

メンバーは２０歳代～５０歳代。団地で月１回、開催している と～かんカフェでは、包丁研ぎや高齢者向けの衣類の販売等を企画し自ら実践している。

工夫していること等

若いパワーを生かす

と～かん連合会の会議では、気付いたことは遠慮なく発言する。また、現場で体力が要る時には、率先して行うようにしている。

みんなの声

- 現役世代の人が会の活動に関心を持ってくてれて頼もしい。（と～かん連合会役員）

❸活動の担い手や拠点をつくる

美鈴が丘団地

空き家を活用した新しい感覚の
多世代交流スペース「ら・ふぃっとHOUSE」

団地内の空き家を活用して誰もが気軽に立ち寄れる交流スペースを設けている。住民約５０人とＮＰＯ法人が企画運営し（設置はＮＰＯ法人）、様々な活動メニューを展開している。食事をしながら会話を楽しむ「おしゃべり食堂」や脳トレを兼ねた「わいわい健康麻雀」、子育て中の親子が集う「おやこ de カフェ」等のほか、各種イベントも行っている。

●内　　容　空き家を活用した交流スペース
（活動メニュー）
おしゃべり食堂、わいわい健康麻雀、おやこ de カフェ、なんちゃって手芸部、男性介護者が集えるコミュニティースペース、各種イベント
●実 施 日　週４日（火～金）
●場　　所　美鈴が丘団地の住宅（空き家、佐伯区美鈴が丘東３丁目）
●利 用 者　１月約３００人
●開始時期　平成２４年 10 月
●実施主体　ら・ふぃっとＨＯＵＳＥ運営委員会、ＮＰＯ法人悠々自在

取組のステップ

年を重ねても楽しく暮らせる団地にしたい

ひとり暮らし高齢者の中には地域との交流の機会が少ない人が増えている。こうした中、団地内で、数人のグループが「年を重ねても団地で楽しく暮らせるように」と、ＮＰＯ法人の立ち上げを検討していた。

一方、団地内で介護事業を行うＮＰＯ法人が、介護や福祉の枠を超えた人と人がつながる地域づくりの必要性を感じ、地域を盛り上げていきたいとの思いを持っていたことから、一緒に高齢者や他の世代が集い交流する場所を作ることになった。

交流スペースとして、団地の空き家を活用

当初は、交流の場として集会所や公民館を考えたが、制約などもあることから、自分たちで自由に使うことができる空間がいいと、空き家を利用することにした。

町内会活動を通じて得た情報を基に所有者に連絡し、借りるための条件等を話し合った。

「ら・ふぃっとＨＯＵＳＥ」オープン

地域の協力を得て準備を進め、平成２４年１０月「ら・ふぃっとＨＯＵＳＥ」がオープンした。ら・ふぃっとは、フランス語で「お隣さん」を意味する。お隣の家に行くような感覚で気軽に立ち寄れる場所にしたいという思いである。

この取組を住民に周知するため、チラシを作成して全戸配布した。配付は町内会の協力を得た。

企画・運営は地域のボランティアが担当

スタッフは地域の人への直接の呼びかけで集めた。最初は数人のメンバーがそれぞれの知り合いに声をかけ、集まった人達がさらに知り合いに声をかけることで増えていった。現在、約５０人のボランティアスタッフが活動している。

対象者を限定しない利用

定期的な活動メニューは、おしゃべり食堂など５つ。幅広い世代が交流することで地域全体が盛り上がるよう、対象者を限定しないで、参加する人の状況や性別、年代に応じたものを組み合わせた。

これ以外にも、随時、イベントを行ったり、部屋が空いている時間は、地域の会合等にも開放している。

■　おしゃべり食堂

毎月５回、手作りランチを提供。高齢者やひとり暮らしの人など多くの人が食事をしながら交流できる場となっている。

■　わいわい健康麻雀

「賭けない・飲まない・吸わない」をモットーに午前中に開いている健康麻雀。脳の活性化にもなると話題になり多くの人が参加。麻雀を通じて交流を深めている。

■　おやこ de カフェ

子育て中のお母さんやお父さんたちの交流の場。スタッフが子どもたちと遊んでいる間にお母さん、お父さんはお茶を飲みながら会話を楽しんでいる。

■　なんちゃって手芸部

初心者から経験者まで幅広く参加。「なんちゃって」とあるように、難しいことは求めずそれぞれのペースで進め、バッグなどの実用的なものを中心に作っている。

■　男性介護者が集えるコミュニティスペース

男性介護者の情報交換の場。ゆったりとした雰囲気の中で参加者が思い思いの話をする。ストレス解消にも一役。

工夫していること

活動の核となる人を中心に進める

すべてボランティアで運営しているため、活動の核になる人の存在が重要。その人を中心に活動を進め、全体の調整を行うようにしている。また、定期的に会議を開いて、活動方針の確認、運営ルールの決定、情報の共有を行っている。

活動を広報する

毎月、イベントスケジュールを作成し、チラシや掲示板、ホームページで広報している。また、多くの人に興味をもってもらうため、年２回、近くの公園で「おとなりさん祭り」を開催している。

朝市にカフェを出店して運営資金に

運営は、全て自主財源である。美鈴モール商店街の朝市にカフェを出店して、その売り上げを運営資金の一部に充てている。

エピソード

- 地域の人が集い顔見知りになることで、自然につながりが生まれ、ら･ふぃっとＨＯＵＳＥの外で会った際も挨拶する光景が見られるようになった。
- おしゃべり食堂等の活動メニューに参加した人が、次回はスタッフとして関わるようになった。

■ 課題・今後の展開 ■

- 活動を継続するため、スタッフを増やす。
- 団地内の他の地区にも活動を広げる。

みんなの声

〈住民〉

- 知り合いに会えるので安心する。自分の第２の家のようで居心地がいい。
- 人と話ができるのが楽しい。自分の話をしっかりと聞いてもらえる。
- いろいろな世代の人が楽しめるメニューがたくさんあり、毎回来るのが楽しみ。

〈主催者〉

- 自分のできることを生かし、誰かに喜んでもらうことでやりがいを感じる。
- 地域の人に物を譲ってもらったり、作ってもらったり‥人のつながりの大切さを実感している。

❹活動の担い手や拠点をつくる

美鈴が丘団地

いつもの仲間に会えるから楽しい

懐かしい縁側で井戸端会議「みすずいこいの部屋」

団地内の公民館を利用して、高齢者が気軽に立ち寄れる場所を開いている。「みすずいこいの部屋」には、毎回、多くの高齢者が訪れ、お茶を飲みながら話をしたり、折り紙や手芸等の小物づくり、健康麻雀などを楽しんでいる。

部屋の開閉や飲み物の準備は、地域のボランティアスタッフが当番で担当している。

●内　　容　高齢者の集いの場「みすずいこいの部屋」
- 団らん
- 地域の人の話を聞く等の行事
- 健康麻雀　等

●実 施 日　週２日（水、金）
●場　　所　美鈴が丘公民館
（佐伯区美鈴が丘南３丁目）
●利 用 者　約３０人
●開始時期　平成２０年９月
●実施主体　美鈴が丘地区社会福祉協議会

取組のステップ

STEP1 高齢者が気軽に集まる場所がない → STEP2 公民館を利用することを計画 → STEP3 事業スタート町内会だより等で広報 → STEP4 定期的に委員会を開催し、状況確認

高齢者が集う場があれば

団地には、老人いこいの家のように高齢者が気軽に集まって活動する場所がない。団地の中心にあるスーパーや銀行に行った帰りに、ひと休みできる場所がほしいとの声が多かった。

そこで、社会福祉協議会が町内会等と協議を重ね、公民館の１階の和室を借りて、集いの場にすることになった。

「みすずいこいの部屋」で居場所づくり

集いの場は「みすずいこいの部屋」と名付け、週２日、午前１０時から午後３時３０分まで開いている。

高齢者が気軽に集まって、折り紙・手芸等の小物づくりや地域の人を講師に話を聞いたり、健康麻雀などをやっている。出入り自由で、部屋にはコーヒーやお茶などの飲み物も置いている。「ここに来れば、知り合いに会える」、「人と話ができて楽しい」と、多くの高齢者が訪れる。また、部屋の開閉や飲み物の準備は、地域のボランティアスタッフが当番で担当している。

工夫していること等

<u>椅子を置いて利用しやすく</u>

公民館に依頼して畳の部屋に絨毯を敷き、椅子席も使えるようにした。

■ 課題・今後の展開 ■

- 何時でも誰でも利用できる場所として利用日を増やす。
- 男性の参加者を増やす。

みんなの声

〈住民〉

- ひとりでいると淋しいけれど、ここに来れば人と会えて楽しい。お世話してくださる方に感謝している。

〈主催者〉

- ２か月毎に委員会を開き、利用状況を確認。皆が利用しやすいものにしたい。

❺活動の担い手や拠点をつくる

高陽ニュータウン

子どもとお年寄りの交流が広がる
放課後の強い味方「ゆうやけルーム高陽」

団地内のタウンセンタービルの一室に子どもの居場所を作り、地域の高齢者が小中学生の様子を見ている。子ども達は放課後に立ち寄り、宿題をする、本を読む、玩具で遊ぶ等、それぞれ思い思いに過ごす。いつでも、大人が見守ってくれているので安心だ。
子どもの居場所づくりは、高齢者の活躍の場にもなり、世代交流が広がっている。

●内　　容　子どもの居場所「ゆうやけルーム高陽」
- 小中学生が放課後に来所して勉強や読書等をする
- スタッフと過ごす 等

●実 施 日　週５日（月～金）１６時～１９時まで
●場　　所　高陽タウンセンタービル
（安佐北区亀崎１丁目）
●開始時期　平成２５年１月
●実施主体　高陽ニュータウンまちづくり市民会議

取組のステップ

STEP1 子どもが放課後過ごす場所が少ない → STEP2 子どもの居場所づくりを計画 → STEP3 事業スタート新聞折り込み等で広報 → STEP4 定期的に会議を開催し継続協議

子ども達が放課後に過ごす場を

団地では、子ども達が放課後に過ごせる場所が少なく、一人で家にいたり、街角に集まるなどの光景が見られた。そこで、地域でできる子どもたちの支援等について考えるグループ「高陽ニュータウンまちづくり市民会議」が、子ども達の居場所づくりの検討を開始した。

市民会議のメンバーは町内の有志で、「この町に住み続けたいと思う町の実現」を目指して、子どもの居場所づくりのほか、お助け隊、小・中・高校生を対象にした勉強会、趣味の時間を過ごす場所の提供、思い入れのあるおもちゃの修理等の活動に取り組んでいる。

「ゆうやけルーム高陽」に来れば安心

住宅供給公社と協議を重ね、団地の中心部にある高陽タウンセンタービルの中に「ゆうやけルーム高陽」を設けることになった。毎週月曜日から金曜日の午後４時から７時まで開放している。

子ども達は、宿題をする、本を読む、部屋の中にある玩具で一緒に遊ぶなど、保護者が迎えに来るまで、思い思いに過ごしている。

スタッフは、地域の高齢者がボランティアとして従事している。いつも、見守ってくれているので子ども達は安心だ。

高齢者の活躍の場に

子ども達の居場所づくりは、スタッフとして活動するお年寄りの活躍の場にもなっている。話し相手になったり、一緒に本を読んだりと、子どもと高齢者の世代交流につながっている。

工夫していること等

広報に力を入れる
新聞の折り込みチラシを発行したり、口コミなどで積極的に広報している。

軽食を用意　パン等の軽食を用意している。

■ 課題・今後の展開 ■

- より多くの人に知ってもらい、利用者を増やす。

みんなの声

〈住民〉
- 子どもが気軽に集える場所ができて良かった。
- 迎えに行くのが遅くなることもあるが、融通を利かしてもらえるので助かっている。

〈主催者〉
- お年寄りも楽しみにしている。居場所づくりの活動を通じて、子育て世代を支え暮らしやすい環境を作りたい。

⑥団地の魅力や和を強くする

五月が丘団地

出展者も来訪者も楽しい！自宅を開放したアート展

「五月が丘まるごと展示会」

期間を決めて自宅を開放し、絵画や陶芸、手づくりアクセサリーの展示、花やハーブの庭の紹介、コンサートや上映会等を開催し、団地内をめぐる展示会。

団地内外の人が交流するきっかけになればと平成１９年に始め、毎年、出展者、来訪者ともに増加している。実行委員会のメンバーは、団塊世代の女性が中心。

●内　　容　自宅のリビングや庭等を開放
- 絵画、陶芸、アクセサリー、手芸、雑貨等の展示
- バラ、山野草、ハーブ等のガーデニング紹介
- コンサート、上映会、カフェ　等

●実 施 日　毎年５月１日～３日
●場　　所　五月が丘団地の住民宅（35 軒・平成 26 年）
●参 加 者　約1,０００人（平成 26 年）
●開始時期　平成１９年５月
●実施主体　五月が丘まるごと展示会実行委員会

取組のステップ

STEP1 自宅で陶芸や彫金を展示している人がいる

STEP2 自宅を開放した展示会を計画

STEP3 事業スタート最初は口コミで広報

STEP4 実行委員会で協議し、企画運営

団地に若い時のように感動できる場所を作りたい

まるごと展示会の発起人２人は、前から月１回、自宅を開放して陶芸や彫金の作品を展示していた。また、他にも数軒、自宅の庭等を開放している人がいた。

「年をとっても心は現役でいたい。団地に若い時のように感動できる場所を作りたい」、「人が交流するきっかけになれば」と考えていた２人は、この取組をイベントとして立ち上げることにした。

「五月が丘まるごと展示会」スタート

最初は、口コミで出展者を募り、１６軒が参加した。イベントは地域でも話題になり、年々、数が増えた。また、これぞという家には、メンバーが訪問して家族にお願いすることも。自宅を開放するには、“家族の理解と協力が不可欠”というのがこの取組のポイントでもある。

来訪者は 1,000 人に

第８回となる平成２６年は３５軒が参加。来訪者は 1,000 人を超える。

内容も、絵画、陶芸等の展示、ガーデニング紹介、コンサート、上映会、カフェと様々だ。団地内外から多くの人が訪れ、まち歩きマップを手に楽しそうに巡っている。

メンバーは団塊世代の女性 ネットワークを大事にしている

男性のサポートもあるが、企画・運営はほとんどが女性。１３人の実行委員は、イベントが近づくと、地域の集会所に集まって企画を練る。おしゃべりからいろいろなアイデアが生まれる。

工夫していること

参加費やバザーの売り上げを運営資金に

展示会の出展者から3,000円を会費として徴収するほか、１１月にバザーを開催し、売り上げを運営資金に充てている。

また、団地内外の商店などから協賛金を募っている。

展示を見て回る巡回バスを運行（第８回）

展示会は団地全体で開催することから、バザーの資金等を活用して、乗り降り自由の無料巡回バスを始めた。来訪者に大変好評である。

常時開放してＰＲ

出展者の増加とともに、常時自宅を開放する人も増えた。

現在、約１０軒が年間を通して、ギャラリー展示やガーデニング紹介などを行っており、ＰＲにつながっている。

集会所も活用

ハワイアン歌謡コンサートやフルートミニコンサート等の演奏には、団地内の集会所を活用している。

また、公民館の協力も得ている。

エピソード

- 開催日が近づくと、近所の人も自宅の前を花で飾るなどの光景が見られるようになった。
- イベントの開催に向けて多くの人が協力しあうことで、普段から声を掛け合う機会が増えた。

■ 課題・今後の展開 ■

- メンバーが高齢化しているので、若い人たちにも参加してもらう。
- 出展者をもっと増やす。

みんなの声

〈来訪者〉

- 団地内でこんなイベントをやっているとは意外だった。面白い。
- プロ級の作品から趣味で作っているものまで幅広くあるので見ていて楽しい。
- まるごと展示会を参考に、自分が住んでいる地域でも何か始めてみたい。
- 出展者がとても楽しそうなのが印象的だった。

〈主催者〉

- テレビや新聞などで取り上げられ、団地内外から訪れる人が増えた。無理をしないで、できるところから始めて、今のようになった。
- これからも、まるごと展示会を通して団地の魅力を発掘し、多くの人に伝えたい。
- 出展者と来訪者、来訪者同士の触れ合いに、人と人のつながりを感じる。

❼ 団地の魅力や和を強くする

彩が丘団地

団地の中をスイム、バイク、ランと駆け巡るトライアスロン大会。スイムは小学校の２５メートルプール、バイクは小学校の隣の広場、ランは団地内の道路を走る。団地内外から多くの参加者や観客が訪れ、沿道から声援が上がる。

彩が丘トライアスロン大会は、団地の大きな魅力の一つになっている。

- ●内　　容　彩が丘トライアスロン大会
- ●実 施 日　毎年、８月第３日曜日
- ●場　　所　彩が丘団地内（彩が丘小学校、周辺道路など）
- ●参 加 者　約８０人
- ●開始時期　平成１０年８月
- ●実施主体　彩が丘トライアスロン実行委員会
  （学区体育協会、各スポーツクラブ）
  共催：彩が丘連合町内会、青少協、女性会、さくら会、彩が丘小学校ＰＴＡ，子ども会、彩が丘小学校、彩が丘公民館

取組のステップ

STEP1 子どもに地域の思い出をつくってほしい → STEP2 団地を会場にしたトライアスロン大会を計画 → STEP3 事業スタート町内会等を通して広報 → STEP4 実行委員会や関係団体で継続協議

子ども達に夏休みの思い出づくりを

子ども達にスポーツへの関心を高めてもらうと同時に地域で夏休みの思い出を作ってもらおうと、小学校の教頭の呼びかけで、団地を会場にしたトライアスロン大会が始まった。

当初は、団地の小学校の児童のみを対象にしていたが、児童数が減少したため、参加者を団地外にも広げ、一般の部や体験コースを設けた。

団地の中をスイム・バイク・ラン

大会は小学校から一般の部まで４部門で、約８０人が参加。半数が団地外からの参加者、沿道から大きな声援が飛ぶ。水泳は小学校の２５メートルプール、バイクは小学校隣の広場、ランは団地内の道路を使用する。

種目	小学生の部			一般の部	体験コース
	１・２年生	３・４年生	５・６年生		
水泳	５０ｍ	１００ｍ	１５０ｍ	２００ｍ	５０ｍ
自転車	１.５㎞	３.０㎞	４.５㎞	６.０㎞	１.５㎞
ランニング	７００ｍ	１０００ｍ	２０００ｍ	４０００ｍ	７００ｍ

運営は地域の人たち総勢１００人

運営は、学区の体育協会やスポーツクラブ、町内会などの地域団体が協力して行っている。事前の打ち合わせやコースの確認、当日の運営など約１００人がボランティアとして関わっている。

工夫していること等

<u>臨場感あふれる大会に</u>

通過順位をパソコンに入力して、最終ランナーがゴールした後２０分以内に、各種目の順位を発表する。

■ 課題・今後の展開 ■

- ボランティアスタッフの負担軽減

みんなの声

〈住民〉

- 子どもの夏休みのいい思い出になった。お世話してくださる人達に感謝する。

〈主催者〉

- 大会の運営に関わって、子ども達の活力が地域を元気にしてくれると感じた。
- 参加者の中から未来のアスリートが生まれることを期待したい。

⑧ 団地の魅力や和を強くする

東観音台団地

笑顔が広がる、輪が広がる

気軽に立ち寄れるみんなの縁側「と～かんカフェ」

団地の中央にある介護事業所の駐車場で、月１回、オープンカフェを開いている。青いテントの下には、お年寄りから子どもまで多くの人が集い笑顔が広がる。ここで知り合いになる人、久しぶりに会う人等々、１杯１００円のコーヒーを飲みながら会話を楽しむ。

運営するのは、町内の有志でつくる東観音台連合会、通称「と～かん連合会」。

- ●内　　容　オープンカフェ「と～かんカフェ」
  - ・コーヒー、クッキー、野菜、花き、婦人服、アクセサリー等の販売
  - ・介護、保険、住宅の相談、血圧の測定コーナー　等
- ●実 施 日　毎月、第１日曜日（１月、２月を除く）
- ●場　　所　東観音台団地内の介護事業所駐車場
- ●利 用 者　約８０人
- ●開始時期　平成２１年１月（野菜、鮮魚の朝市でスタート）
- ●実施主体　東観音台連合会（と～かん連合会）

取組のステップ

STEP1 団地内のスーパーが撤退。朝市を開く → STEP2 定期的に集えるカフェの開催を計画 → STEP3 事業スタートオリジナル新聞で広報 → STEP4 イベント委員会で企画を検討

介護事業所の駐車場をオープンカフェに

団地の中央にあったスーパーが撤退したことから、跡地で「と～かん朝市」を開催していた。その後、ここに介護事業所が進出したため、駐車場を借りて「と～かんカフェ」を開催することになった。

目印は幟と青いテント、１月、２月を除き、月１回、第一日曜日に開いている。

「と～かん連合会」が運営

お世話をするのは、東観音台連合会、通称「と～かん連合会」（Ｐ６）。町内会役員のＯＢなど有志の集まりで、町内会の行事を引き受けたり、有価資源回収事業の収益金を財源にいろいろな催しを行っている。

世代を超えた交流の場として定着

訪れた人は、１杯１００円のコーヒーを飲みながら会話を楽しんでいる。他にも、手作りクッキーや野菜、花き等の販売、相談コーナーなど多彩。毎回、約８０人が参加し、世代を超えた交流の場として定着している。

工夫していること等

<u>若手メンバーも参加して盛り上げ</u>

と～かん連合会の若手メンバー「男子会、女子会」（Ｐ９）がスタッフとして参加し、包丁研ぎや婦人服の屋台を企画している。

■ 課題・今後の展開 ■

- 参加者のニーズに合ったメニュー展開、リニューアルや住み替え等への対応

みんなの声

〈住民〉

- と～かんカフェに行くと、いろいろな人と話ができて楽しい。
- お年寄りが声をかけてくれるので子どもがとても喜ぶ。自分もうれしい。

〈主催者〉

- 自分たちが楽しめば、人は集まるという確認が持てた。活動を続けていきたい。

❾ 団地の魅力や和を強くする

藤の木団地

花づくりを通してつながりを深める
団地ののり面を彩る「シバザクラの花文字」

団地ののり面を２万株のシバザクラが彩り、「ふじのきだんち」の文字が浮かびあがる。この素晴らしい景観は団地のシンボルにもなっており、平成２６年には「第２４回全国花のまちづくりコンクール」で努力賞を受賞した。子どもから大人まで苗植え等の作業に参加し、花づくりを通して世代を超えた交流が始まっている。

●内　　容　団地のり面へのシバザクラの植栽
- 整地
- 草取り、花植え　等

●場　　所　藤の木団地東側
●開始時期　平成２４年４月
●実施主体　藤の木学区まちづくり推進協議会

取組のステップ

STEP1 団地ののり面の景観があまりよくない → STEP2 のり面にシバザクラを植えることを計画 → STEP3 事業スタート町内会等を通して広報 → STEP4 まちづくり推進協議会で継続協議

団地ののり面を花畑にしたい

雑草の生える団地東側ののり面を夢のある花畑にできないだろうか…。地域の会合で出た意見をきっかけに、シバザクラの植栽運動が始まった。

団地全体の活動にするため、会合等でシバザクラを植える目的を丁寧に説明した。その結果、４つの町内会の役員とまちづくり代議員が活動に関わることになった。

「ふじのき」の花文字がシンボルに

縦２０m、横２００mにわたって、「ふじのきだんち」の文字を白と赤の花で植え分ける。春になると、約２万株のシバザクラが彩り、団地のシンボルとなっている。団地の外から見に来る人もいる。

花づくりでコミュニケーションが広がる

草取り、整地、苗植えなど、子どもから大人まで約６０人がボランティアとして参加する。普段は顔を合わせる機会の少ない住民が一緒に作業をして言葉を交わすことで、コミュニケーションが広がっている。

工夫していること等

- 広島市の助成金を活用

  資材の購入など、広島市のひと・まち広島未来づくりファンドHm²（ふむふむ）の助成金を活用した。

■ 課題・今後の展開 ■

- 活動に参加する人を増やすこと、資金の確保
- 活動報告など広報活動の充実

みんなの声

〈住民〉

- 春になってのり面にシバザクラが満開になるのが毎年待ち遠しい。

〈主催者〉

- 雑草の生い茂るのり面を夢と希望のある花畑にできた。藤の木学区における諸活動の大きな財産になると思う。

⑩ 団地の魅力や和を強くする

五月が丘団地

アサガオでまちづくり 交流が広がる
「五月が丘アサガオプロジェクト」

公民館の呼びかけで始まった「五月が丘アサガオプロジェクト」。最初は、集会所で育てていたが、年々、活動が広がり、一家に一鉢運動へと移行した。夏になると、あちらこちらの家の庭先でアサガオが咲き並び、涼しげな光景に癒されることもしばしば。

種を分け合ったり、育て方を相談するなど、花づくりを通して住民の交流が広がっている。

●内　　容　五月が丘アサガオプロジェクト「一家に一鉢 アサガオ運動」
- 個人宅での種まき、育成
- 公民館による種の配付、写真展示　等

●場　　所　五月が丘公民館、団地内の民家
●開始時期　平成２２年４月
●実施主体　五月が丘公民館
　　五月が丘団地内の町内会

取組のステップ

アサガオのある心やすらぐまちに

公民館職員が、前年に公民館で育てたアサガオの種を希望者に配ったことをきっかけに、「五月が丘アサガオプロジェクト」が始まった。

団地をアサガオで彩り、心やすらぐまちをつくりたいとの思いから住民に呼びかけた。多くの人に参加してもらえるよう、育て方等の講習会も開いた。

一家一鉢運動へと広がる

プロジェクトの参加者は、最初は５６人で、翌年は１２６人、その翌年には１８６人と、一家一鉢運動として地域に広がっていった。

涼しさをもたらすだけでなく、見る人の心を癒してくれると好評だ。また、水やりの時に声をかけるなど、アサガオを話題に交流が深まっている。

公民館で展示

公民館では、家庭で育てたアサガオの写真を展示している。「あさがおサロン」と名付けたロビーで、多くの人が集い写真を見ながら会話を楽しむ。

工夫していること等

<u>公民館も率先してアサガオを育てる</u>

一家一鉢運動が広がるよう、公民館も率先して取り組んでいる、公民館の敷地にプランターを置いて、壁面全体にアサガオのツルを伸ばしている。

■ 課題・今後の展開 ■

- 一家一鉢運動への参加者を増やす。

みんなの声

〈住民〉

- アサガオは、育てやすいのでプロジェクトに参加しやすかった。
- 団地のいろいろなところで、アサガオが咲いている光景がとてもいい。

〈主催者〉

- 皆さんの協力で、アサガオづくりの輪が広がり地域の絆が深まった。これからも、楽しんで花づくりができるよう呼びかけていきたい。

⑪高齢者の生活を応援する

美鈴が丘団地

家の庭先等に「みんなのイス」と書いたステッカーを貼ったイスが所々に見られる。食卓のイスのようなものや、花壇に細い木を並べて座にしたものなど形もいろいろ。買い物の帰りに荷物を置いて一休みしたり、散歩の途中で座ったりしてほしいと、住民から提供されたものだ。イスを通して、住民の新たな交流が生まれている。

●内　　容　ら・ふぃっとHOUSE「みんなのイス」プロジェクト
- 個人宅や通り等へのイスの設置
- 置いたイスへの「みんなのイスステッカー」取り付け

●場　　所　美鈴が丘団地内
●開始時期　平成２６年３月
●実施主体　ら・ふぃっとHOUSE運営委員会有志

取組のステップ

STEP1 坂道が多い。休憩するところが少ない

STEP2 団地にイスを置くことを計画

STEP3 事業スタート チラシや町内会等で広報

STEP4 グループで継続協議

「みんなのイス」プロジェクト

団地には、坂道が多く、買い物の途中等で休憩するところが少ない。そこで、団地内で多世代交流拠点「ら・ふぃっとＨＯＵＳＥ」（P10）を運営するＮＰＯ法人と町内の有志が緩やかなグループを作り、通りにイスを置くプロジェクトを開始した。

地域の人達も巻き込み、ご近所の交流のきっかけにしたいとの思いもあった。

住民の協力を得て、地域の取組に広げる

イスの仕様は、既成のものか木製の独自デザインによるものとし、各家で使わなくなったものを提供してもらうことも良しとした。置く場所は、自宅の周りの私有地の部分の小さなスペース（花壇、ガレージ、勝手口、塀の前）、さらにはバス停の前などで、住民の協力を得て進めた。イスには「みんなのイス」のステッカーを取り付けて目印にし、自由に座ることのできるイスだということを明示している。

できることから始める

できる範囲から始めようと、最初は、一部の街区から始め６軒でスタート。その後、他の街区にも広げ１１軒になった。

工夫していること等

住んでいる地域にあったものを

他都市の事例を調べたり、何度も団地内を見てまわったりと、自分達の住んでいるまちに相応しいやり方をいつも考えている。

■ 課題・今後の展開 ■

- 家の前のイスから、通りのイスに、そして町内のイスにと活動を広げていきたい。

みんなの声

〈住民〉
- 家の前にイスが置いてある光景は、ほのぼのしていて癒される。

〈主催者〉
- 小さな試みが多世代交流や居場所づくりにつながり、活力と魅力ある団地にしたい。

⑫高齢者の生活を応援する

彩が丘団地

団地の坂道で買い物や散歩の途中に休憩している人を見かけることが多くなった。そこで、ベンチを置く取組が始まった。住民の絆を深める「彩が丘団地元気ベンチプロジェクト」である。広島工業大学の学生たちが、低木や草花のある緑地帯など団地の美しい環境を生かした素晴らしいアイデアを提案した。

●内　　容　彩が丘団地元気プロジェクト
（広島工業大学との連携）
- 大学生によるベンチのデザイン提案
- 住民アンケート
- 小学生によるベンチへのタイル貼り

●場　　所　彩が丘団地内
●開始時期　平成２６年７月
●実施主体　彩が丘連合町内会

取組のステップ

STEP1 坂道で休憩している高齢者が増えた

STEP2 団地にベンチを置くことを計画

STEP3 事業スタート 広島工業大学の提案発表

STEP4 町内会や関係機関で継続協議

住民の絆を深めるシンボルづくり

団地では、各家の周りの緑地帯に低木や草花が植栽され、景観の良い街並みが連なっている。一方、坂道が多く買い物帰りや散歩途中に一休みしている高齢者がいる。

そこで、住民の協力を得て、この緑地帯にベンチが置けないか、また、住民の絆を深めるシンボルづくりができないかと考え、広島工業大学の協力を得てベンチを置くことになった。

広島工業大学の学生にプランを依頼　プロジェクトが始まった

広島工業大学平田准教授のゼミの学生１２人が３グループに分かれて検討を始めた。学生たちは、公園や歩道など団地内を見て回り、団地の魅力をどうベンチに結びつけるか考えた。

平成２７年２月の発表会では、団地住民等を前に、花壇と収納の付いたベンチや緑地帯の上から座面をかぶせるベンチなど４案を提案した。

小学生が描いたタイルで彩りを

これから学生の提案をもとに団地住民にアンケートを行い製作に移る。また、ベンチの周りには、小学校の児童が描いたタイルを貼ってって彩りを添えることにしている。

みんなの声

〈住民〉

- 団地の課題について皆で考えるいい機会になった。どんなベンチになるのか楽しみ。

〈主催者〉

- 広島工業大学の学生の提案は、どれも新鮮で素晴らしい。是非、実現したい。
- 高齢化が進んでいるが、団地の魅力をどう生かしていくか考えていきたい。

⓭高齢者の生活を応援する

五月が丘団地

在宅介護を応援しようと、地区社会福祉協議会が呼びかけたボランティアグループが「介護タオル」を作っている。高齢者のサロンの参加者などが公民館に集まり、古布をひとつひとつ丁寧にＡ４サイズに切って束ねる。出来上がったものは、認知症在宅介護者の会や高齢者施設等に送る。活動は、高齢者の閉じこもり防止にもつながっている。

●内　　容　介護タオルの作成
- 古布の裁断、タオルづくり
- 在宅介護者等への送付

●実 施 日　随時
●場　　所　五月が丘公民館、集会所
●参 加 者　約３０人
●開始時期　平成２６年６月
●実施主体　五月が丘地区社会福祉協議会

取組のステップ

STEP1 在宅の介護者は使い捨てタオルが必要

STEP2 介護タオルを作成して配ることを計画

STEP3 事業スタート社協だより等で広報

STEP4 定期的に集まって活動を計画

古布が介護の救世主に

地区社会福祉協議会のメンバーがボランティア研修に参加した際、在宅で介護をしている人が使い捨てのタオルを必要としていることを知った。どこの家にでもあるものをちょっと加工することで役立つのであればと、介護用の使い捨てタオルを作ることになった。

ボランティアで介護タオルづくり

早速、社協だより等を通じて、使い古しの綿１００％の布を募ったところ、たくさんの古布が集まった。タオルやＴシャツ、パジャマなどいろいろだ。

古布は、使いやすいように、Ａ４サイズにカットして束ねる。作業は、高齢者のサロンの参加者や地域の住民約３０人がボランティアで行っている。

そして、できたものを認知症在宅介護者の会や地域の特別養護老人ホーム、デイサービスセンターなどに送る。肌に優しくて気持ちいいと介護している人も介護されている人にも好評だ。

市外からも多くの古布が届く 作った介護タオルは１万枚を超える

平成２６年末までに出来上がったタオルは約 4000 枚。その後、新聞で取り上げられたことをきっかけに、岩国市や福山市など遠方からも古布が届き、ボランティアの協力で 7,500 枚を作った。

タオルづくりは、触れあいづくり

作業は、公民館や集会所に集まり、みんなで話をしながら進めている。高齢者の閉じこもり予防にも効果を上げている。

工夫していること等

作業は集まりやすい場所で

地域の人が参加しやすいよう、作業は公民館で行っている。

■ 課題・今後の展開 ■

- 継続して古布の提供を受けることができる仕組みをつくる。

みんなの声

〈住民〉

- こういう機会に外に出かけて、地域の人とつながりができるのはうれしい。

〈主催者〉

- 五月が丘団地で、在宅介護をしている人に広めていきたい。
- 皆さんに喜んでもらいうれしい。これからも、細く、長く活動を続けていきたい。

⑭高齢者の生活を応援する

毘沙門台団地

メインテーマは「メンズ」。仕事をリタイヤした男性の地域デビューを応援する「メンズサロン」と「畑でサロン」。集まった人たちが缶ビール１本を楽しみながら最近の出来事や体験談などを話したり、団地の近くの畑で野菜を作り、採れた野菜で収穫祭までしてしまう。仲間との語らいや協働作業を通じて絆を深めている。

	メンズサロン	畑でサロン
●内　　容	会費制で缶ビール１本を飲みながら会話する	畑で野菜作りをする
●実 施 日	第３日曜日 17:00～19:30	週２日（火、金）
●場　　所	毘沙門台団地の集会所（安佐南区毘沙門台２丁目）	安佐南区沼田町伴字新畑
●参 加 者	２０人～２５人	１２人
●開始時期	平成２１年７月	平成２３年７月
●実施主体	毘沙門台学区社会福祉協議会	毘沙門台学区社会福祉協議会

取組のステップ

男性の地域デビューを後押し

地域の会合で、仕事をリタイヤした男性が家に閉じこもり、地域に溶け込めていない傾向にあるとの声があった。そこで、男性が参加しやすいよう、既存のふれあいサロンとは別に「メンズサロン」を開設することになった。

「メンズサロン」スタート、缶ビール１本で話が弾む

メンズサロンは数人の世話人で立ち上げた。会費制で、缶ビール１本と簡単なつまみを用意して、近況や体験談等を話し合う場である。最初は、様子見の人が多く、わずか数人の参加者でスタートした。その後、徐々に参加者が増え、交流を深めていった。

「畑でサロン」に発展

メンズサロンの会話の中で「家庭菜園をやりたい」との声がでたことをきっかけに「畑でサロン」が誕生した。団地の近くの耕作放棄地を借りて野菜を栽培し、採れた野菜でバーベキューや芋煮会を開いている。

工夫していること等

- 長く続けるために
  「来るものは拒まず、去る者は追わず」、「基本的なルールを守ること」を会のモットーにしている。
- 楽しみながら地域への貢献につなぐ
  会話の中から、その人の知識や経験、技術を聞きだし、地域で活躍してもらう場面をつくるようにしている。

■ 課題・今後の展開 ■

- 協働労働型の事業展開を検討する。

みんなの声

〈住民〉
- メンズサロンに参加して、皆さんの話を聞き、地域のことが分かるようになった。
- 一人ではつらいけれど、仲間と語らい、楽しみながら野菜を育てる作業は楽しい。

〈主催者〉
- メンズサロンは、全員発言、批判と議論なし、記録は取らないのという原則で運営している。これが、うまくいっているポイントだと思う。
- 集まったメンバーの有志がおやじバンドを結成して、施設訪問や町内会のイベントに参加するようになるなど、活動の広がりを感じる。

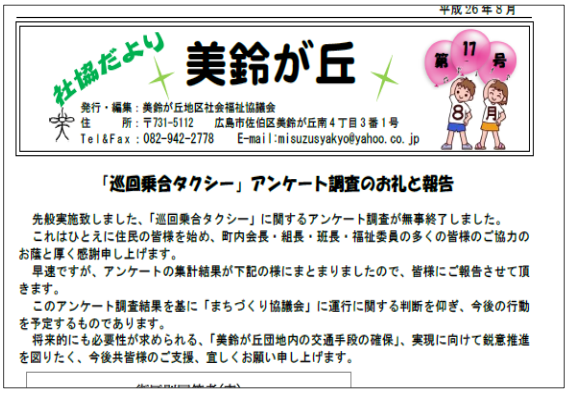
⑮ 移動しやすくする

美鈴が丘団地

入居開始後３０年以上経過した団地は高齢化が進んできた。この団地で住み続けたいとの思いから、地域団体の代表、商店街、スーパー、タクシー会社等の関係者が集まって、巡回乗合タクシーの導入を検討することにした。まず、町内会の協力を得て、全戸を対象にアンケートを実施。現在も、月１回、検討会を開き、熱心に協議を進めている。

●内　　容　巡回乗合タクシーの導入検討
- 住民アンケート調査
- 巡回乗合タクシー検討会の開催

●実 施 日　月１回（検討会）
●場　　所　美鈴が丘公民館
（佐伯区美鈴が丘南３丁目）
●開始時期　平成２６年３月
●実施主体　美鈴が丘地区社会福祉協議会


平成26年8月

社協だより 美鈴が丘 第17号 8月

発行・編集：美鈴が丘地区社会福祉協議会
住　　所：〒731-5112　広島市佐伯区美鈴が丘南４丁目３番１号
Tel&Fax：082-942-2778　E-mail:misuzusyakyo@yahoo.co.jp

「巡回乗合タクシー」アンケート調査のお礼と報告

先般実施致しました、「巡回乗合タクシー」に関するアンケート調査が無事終了しました。
これはひとえに住民の皆様を始め、町内会長・組長・班長・福祉委員の多くの皆様のご協力のお蔭と厚く感謝申し上げます。
早速ですが、アンケートの集計結果が下記の様にまとまりましたので、皆様にご報告させて頂きます。
このアンケート調査結果を基に「まちづくり協議会」に運行に関する判断を仰ぎ、今後の行動を予定するものであります。
将来的にも必要性が求められる、「美鈴が丘団地内の交通手段の確保」、実現に向けて鋭意推進を図りたく、今後共皆様のご支援、宜しくお願い申し上げます。

取組のステップ

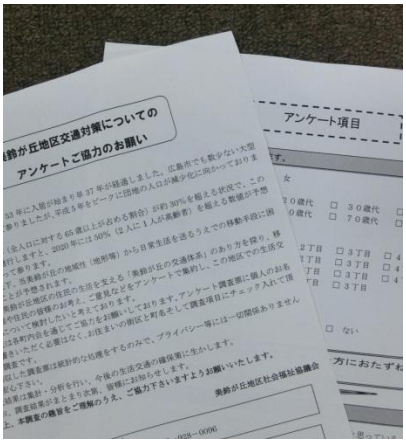
STEP1 高齢者の増加 坂道が多く買い物等が大変 → STEP2 巡回乗合タクシーの導入検討を計画 → STEP3 事業スタート 住民アンケートで意見を聞く → STEP4 検討会で継続協議

坂道が多く、年を重ねると買い物が大変

団地は入居開始後３０年以上が経過し、高齢者が増えてきた。「年を重ねると買い物が大変だ。行きはいいけれど、荷物を持って帰るのはつらい」という声が上がったのをきかっけに、広い団地の中を移動できる乗り物の導入について検討することになった。

巡回乗合タクシーの検討を始める

早速、地域団体の代表、商店街、スーパー、タクシー会社等の関係者が集まった。団地を巡回する乗合タクシーの導入について検討することになり、会議には市の担当者も加わった。



まず、住民へのアンケートから開始した。質問内容は、車の運転を何歳まで続けるか、買い物や外出の手段、巡回乗合タクシーの導入の賛否、導入した場合の利用頻度など１１項目に渡る。

アンケートの集計結果、導入希望が９５％を上回ったことから、平成２６年３月「巡回乗合タクシー検討会」を立ち上げ、本格的に検討を開始した。検討会は、月１回、公民館で開かれ、平成２７年２月で１２回に上る。

その後の協議の結果、平成２７年１０月にテスト運行を開始し、ルート、便数、採算、運行方法など具体的な事項を検討することになった。

工夫していること等

多くの住民が関心を持つように

多くの人に関心をもってもらうよう、広報みすずや社協だより等で、検討会への参加を呼びかけたり、検討状況を知らせている。

■ 課題・今後の展開 ■

- 運行に当たっての諸課題（経路、利用料金、利用の見込等）について、慎重に検討する。

みんなの声

〈住民〉

- このような検討が始まって心強い。どんな内容になるのか関心がある。

〈主催者〉

- できるだけ多くの意見を取り入れ、美鈴が丘団地に相応しい計画にしていきたい。

⑯ 買い物をしやすくする

杉並台団地

団地内の大型スーパーが突然撤退。歩いていける範囲にスーパーがなくなったことで、多くの高齢者が買い物に困っていた。

この状況を何とかしようと、町内会が結集して、移動販売車「ヒロデンジャー」を誘致。住民に買い物とコミュニティの場を提供している。

●内　　容　移動販売車（大型バス改造）
　　・野菜、生鮮食品、冷凍食品、日用品等８００品目を販売
●実 施 日　週３日（火、木、土）１１時～16 時（火は１４時）
●場　　所　杉並台青空市場（佐伯区湯来町杉並台２６-１１）
●利 用 者　１日約 150 人
●開始時期　平成 25 年８月
●実施主体　杉並台連合町内会

取組のステップ

スーパーが突然撤退

平成２４年１１月、前日まで開店していた団地内のスーパーが突然撤退した。

７５歳以上の高齢者が約２７０人と高齢化が進んでいる団地では、スーパーがなくなったことで買い物に困る人が多数いた。

団地内の町内会が結集して作戦会議

スーパーが撤退した６日後、団地内の８町内会長を緊急招集した。その後も何度も集まり対応を協議した。何とかスーパーを誘致しようと、市内にチェーン店を持つ店舗に出店を依頼したが何れも断られた。その数は１０社に上る。

その間にも、少しでも高齢者の負担を少なくしたいと、団地内にある個人商店や巡回販売、宅配の情報を記載したチラシを作成して全戸に配布した。

こうした中、一人の町内会長が、広電ストアが大型バスを改造した移動販売車を稼働する団地を探しているとの情報をキャッチした。これを契機に、移動販売車誘致へと動き出し、町内会長を中心に広電ストアと協議を重ねた。

平成２５年８月３日　移動販売車「ヒロデンジャー」が団地に

遂に移動販売車「ヒロデンジャー」が団地にやってきた。当初は、毎週火・木・土の１１時から１６時まで、元スーパーの駐車場を会場にした。

雨や雪の日に外で待つのが大変ということもあり、その後、団地の中心部にある屋根付きの「杉並台青空市場」に移動した。

工夫していること

導入時に住民へアンケート

ヒロデンジャーの導入前に、住民を対象にアンケート調査を行った。利用するかどうか、利用する場合の曜日、必要な商品などについて聞き、これが現在も活きている。

買い物をしながら交流を

買い物に訪れた人が、ちょっと話をしたり休憩できるよう、会場内に長椅子を置いて、交流の場を作っている。

チラシで情報提供

多くの人に利用してもらえるよう、移動販売の実施日や販売品目等を記載したチラシを配布している。

利用者のニーズに柔軟に対応

利用時間や販売品目など住民の希望に沿うよう、町内会と広電ストアは随時、協議を行っている。

利用者から必要な商品を聞き、次回の販売日に揃えるようにしている。また、火曜日は魚、木曜日は肉、土曜日は野菜とメリハリをつけている。

エピソード

- 広電ストアのスタッフが、毎回、買い物に訪れた人に声をかけ、温もりのある雰囲気になっている。また。歩くのが難しい人は、広電ストアが「ヒロデンジャーゼロ号」で、荷物と一緒に自宅まで送ることもある。
- 「杉並台青空市場」（市の施設）に会場を移す際、市の担当課に相談し、対応を一緒に考えてもらった。
- 元スーパーの駐車場を会場にしていた頃は、雪が降る度に数人で雪かきをしたこともある。

■　課題・今後の展開　■

- 利用者をもっと増やす。
- 会場の近くに洋式トイレを設ける。

みんなの声

〈住民〉

- 買い物がしやすくなった。本当に助かっている。
- 毎回、買い物に来る。ここで、知りあった人と話をするのが楽しみだ。
- 担当スタッフが丁寧に対応してくれるのが嬉しい。

〈主催者〉

- 皆さんの笑顔を見る度、皆でがんばって誘致して良かったと思う。
- 事業者が常に買い物弱者のことを考えて対応してくれる。
  また、とんどや盆踊りなど、団地内のイベントで使用する食材等の調達を引き受けてくれるのもいい。

⑰ 住みやすい環境にする

杉並台団地

連合町内会と団地の管理組合が連携して空き区画（空き地）の維持管理を行っている。年２回、草を刈って、虫の発生を防いだり、見通しをよくして防犯効果を高める。団地の景観がよくなると住民にも好評だ。また、管理組合が空き地の所有者や連絡先を把握する仕組みを作っているので、何かあった時の連絡体制も十分だ。

- ●内　　容　空き区画（空き地）の維持管理
  - ・ 管理組合による草刈り 等
- ●実 施 日　通年
- ●場　　所　杉並台団地の空き区画
- ●件　　数　約１２０区画
- ●開始時期　平成２０年６月
- ●実施主体　杉並台連合町内会、杉並台管理組合

取組のステップ

STEP1 団地に空き区画（空き地）が多数ある → STEP2 空き地の草刈りをすることを計画 → STEP3 事業スタート会報等で広報 → STEP4 連合町内会、管理組合が協議

空き地の維持管理を管理組合で

団地には1,027の住宅区画があり、全ての区画が売却されている。この内、住宅が建っていない区画が約２００あり、半数は駐車場にしたり野菜や花を植えて利用し、残りは草地の状態になっている。

団地には、団地の財産管理等を行う管理組合があり、空き区画（空き地）の所有者は、維持管理経費として月額1,000円を負担する仕組みになっている。

連合町内会と管理組合が連携して草刈り

空き地を放置すれば、草が伸びて虫が発生したり、視界が悪くなって防犯上問題がある、また、団地全体の景観にも影響する。そこで、連合町内会と管理組合が連携して、草刈りを行うことになった。７月と１０月の年２回、シルバー人材センターに依頼している。平成２６年は１１９区画を行った。かかった経費は、管理組合が負担する。

空き地の所有者との連絡が可能

空き地の所有者の把握が難しく困っている団地が多い中、この団地では、所有者が全て把握できるので、何かあった時に速やかに連絡することができる。

工夫していること等

<u>刈り取った草は有効利用</u>

除草の際の搬出費用を抑えるため、刈り取った草は冬まで保管して、団地で行われるとんど祭りに使うなど有効利用している。

■ 課題・今後の展開 ■

- 空き地の有効利用を検討する。

みんなの声

〈住民〉

- 団地内に荒れた空き地がないので、景観がいい。
- 市外に住んでいるので、再々、団地に行くのが難しいが、空き地の管理や草を刈ってもらえるので安心だ。（空き地所有者）

〈主催者〉

- 団地に管理組合がある強みを生かして、これからも、いろいろなことをやっていきたい。（連合町内会役員）

⑱ 災害に備える

東観音台団地

児童 生徒 住民 1,200 人が参加

東北のボランティア体験を伝える「五日市高校防災訓練」

五日市高校は、災害時の生活避難場所になっていて、普段から防災教育に熱心に取り組んでいる。東日本大震災復興支援のボランティアに参加した経験を生かし、大規模な防災訓練を行った。高校生と住民による小学生の避難誘導や、竹筒を使った炊き出し体験など、児童、生徒、住民約１２００人が参加。今回の訓練を通して、地域との信頼、絆が一層深まった。

●内　　容　土砂災害を想定した五日市高校と地域の防災訓練
- 避難誘導訓練
- サバイバル体験、炊き出し訓練、救急教室
- 防災講話、トリアージ訓練
- ドクターヘリコプターによる訓練見学　等

●実 施 日　平成２６年１１月５日
●場　　所　五日市高校、観音台公民館、集会所など
（佐伯区観音台３丁目）
●参 加 者　約 1200 人
●実施主体　広島県立五日市高校

取組のステップ

STEP1 学校が生活避難場所になっている → STEP2 土砂災害を想定した訓練を計画 → STEP3 防災訓練実施町内会等を通して広報 → STEP4 高校と地域が継続して連携

東日本大震災復興支援ボランティアの体験を伝えたい

五日市高校は、防災教育に熱心に取り組んでおり、学校として東日本大震災復興支援を企画し、ボランティア活動のため現地に生徒を派遣している。

この体験を通して学んだ「防災・減災」の知恵を防災訓練で生かしたいと考え、小学校や自主防災会等の地域団体、消防署、警察署、区役所等と一緒に大規模な訓練を行うことになった。

地域の人と一緒に避難誘導や炊き出し体験

訓練は、土砂災害を想定して、午前９時ごろから約５時間にわたり地域の住民や小学生など約 1,200 人が参加した。

高校の生徒が小学校に児童を迎えに行き、生活避難場所になっている同校まで、自主防災会の人と一緒に避難誘導、住民の協力で学校内に設けた非常用の「かまどベンチ」で炊き出し体験、竹筒を使ってご飯やパンを作るなど、学校と地域が一体となって行った。災害に対する意識が高まっただけでなく、訓練を通して学校と地域の交流も深まった。

工夫していること等

普段から防災に関心を持つように

防災の大切さを生徒に伝えるため、東北の被災地との交流を続けたり、普段から地域との連携を大事にしている。

■ 課題・今後の展開 ■

- 他者のために何ができるかを考え行動できる防災活動リーダーを育成するための基礎作り

みんなの声

〈住民〉

- このような訓練を通して、地域の防災意識が高まり心強い。(住民)
- いい体験ができた。いざという時は、仲間と力を併せて役に立ちたいと思った。(生徒)

〈主催者〉

- 避難所の役割を学び、被災時にできることを確認する機会となった。地域と一緒に、お互いに助け合えることのできる関係を作っていきたい。

⑲ 団地の将来を考える

杉並台団地

住民の声をこれからの地域づくりに反映しようと、町内の全世帯を対象にしたアンケートについて検討を始めた。平成２７年中の実施に向けて、町内会の役員等で質問項目や配付方法等について協議を進めている。

●内　　容　住民アンケート調査（町内の全世帯）
●実施時期　平成２７年
●実施主体　杉並台団地内の町内会

住民の声を地域づくりに生かして

団地ができてから３０年以上が経過し、住民の生活環境は、随分、変化してきた。スーパーが撤退して買い物が不便になったことや、見守りが必要な高齢者が増えたことなど、課題も多くある。そこで、町内会では、住民の意見を情報共有して、団地のこれからを考えようと、全世帯を対象にしたアンケート調査の検討を始めた。

町内会の役員等で協議を進める

アンケートの質問項目や配付方法等、役員会で協議を進めている。行事の見直しについて聞いてはどうか、他にも、近所との付き合いの状況や困っていることを聞いてみよう等、意見は様々。配付、回収の際の見守りも視野に入れている。

工夫していること等

普段から地域でコミュニケーションを

普段から地域のことを気にかけ、行事や回覧を回す際などに住民とコミュニケーションを取って様子を聞くようにしている。

みんなの声

- 町内には約 100 世帯が住んでいる。地域の状況に沿ったきめ細かい内容のアンケートにしたい。また、結果をどう生かすかも考えていきたい。（町内会役員）

佐伯区団地元気フォーラムの概要

１　目的

佐伯区には、高度経済成長期に造成された団地が多数あり、住宅団地には約６万８千人が居住している。これらの団地は、人口減少や高齢化などが進み、それに伴って様々な問題が現れ、生活や地域活動にも影響をもたらしている。

一方で、美鈴が丘団地での空き家を活用した新しい交流スペースづくりをはじめ、区内の各団地でも、様々な活動が積極的に行われている。

こうした現状を、団地住民を中心とした区民が情報として共有し、今後の具体的な取組について話し合う場を設けることで、住民同士の新しいつながりや行動の契機とし、住宅団地の活性化や新しい地域運営の一助とする。

２　テーマ

団地に新しい動きをおこそう！つながりをつくろう！

３　内容等

①情報を交換する

居住する住宅団地の現状や課題、取組について情報交換する。

②先進事例を研究する

先進事例の話を聞く、現地視察をする。

③取組に協力する

参加者等の取組に対して助言し、応援を行う。

④提案する

新しい活動につながるアイデアを考え、提供する。

⑤情報を発信する

団地元気フォーラムの活動をホームページに掲載するなど周知する。

※　話し合いの内容は原則として公表する。

４　参加者

①団地問題に関心のある方

②ら・ふぃっとＨＯＵＳＥ運営委員会メンバー

③広島郊外住宅団地ネットワークメンバー

５　事務局

佐伯区役所市民部地域起こし推進課

佐伯区団地元気フォーラム活動状況

第１回　平成２６年７月２８日（月）
- ○ 自己紹介
- ○ 佐伯区団地元気フォーラムの概要説明
- ○ 広島郊外住宅団地ネットワークの活動報告
- ○ 各団地の課題や取組について情報交換

第２回　平成２６年９月２６日（金）
- ○ 毘沙門台団地の取組について活動報告
- ○ 東観音台団地の取組について活動報告
- ○ 各団地の課題や取組について情報交換

第３回　平成２６年１０月１６日（木）現地視察①
- ○ 美鈴が丘団地
- ○ 杉並台団地

平成２６年１２月７日（日）現地視察②
- ○ 東観音台団地
- ○ 五月が丘団地

第４回　平成２７年１月１６日（金）
- ○ 彩が丘団地元気ベンチプロジェクト最終発表会
- ○ 彩が丘団地現地視察

第５回　平成２７年１月２２日（木）
- ○ 現地視察について報告
- ○ シンポジウムの開催と取組実践ファイルの作成について
- ○ 広島郊外住宅団地ネットワークによる取組事例紹介
- ○ 各団地の課題や取組について情報交換

シンポジウム開催　平成２７年３月１４日（土）
- ○ 佐伯区団地元気フォーラムの活動報告
- ○ 基調講演「住宅団地のこれからについて」
- ○ 取材報告「記者の視点　住宅団地の明日を創る」
- ○ ディスカッション「活動紹介と今後に向けて」

第６回　平成２７年３月２５日（水）
- ○ 取組実践ファイルの作成について報告
- ○ 各団地の課題や取組について情報交換

住宅団地 シンポジウム

団地に
新しい動きを
おこそう！
つながりを
つくろう！

高齢化、買い物、交通など住宅団地の課題は様々です。
今、自分たちの暮らす住宅団地を元気に！と、各地で新しい動きが始まっています。
有識者、記者、住民など、それぞれの立場からの実践例を聞き、団地のこれからについて一緒に考えましょう。

平成 27 年 **3** 月 **14** 日（土）13:00~15:30

佐伯区民文化センター 2 階大会議室 佐伯区五日市中央 6-1-10
定員 150 名（要申込）

佐伯区団地元気フォーラムの活動報告（佐伯区役所）

基調講演「住宅団地のこれからについて」
矢冨 直美 氏（東京大学高齢社会総合研究機構　客員研究員）

取材報告「記者の視点　住宅団地の明日を創る」
野田 華奈子 氏（中国新聞社記者）

ディスカッション「活動紹介と今後に向けて」
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　宮本 茂 氏（広島郊外住宅団地ネットワーク）
パネリスト
河井 裕子 氏（美鈴が丘団地）
土居河 博 氏（杉並台団地）
関口 禮伸 氏（廿日市ニュータウン団地）
杉山　朗 氏（広島市政策企画課）

主催　佐伯区団地元気フォーラム、広島郊外住宅団地ネットワーク、佐伯区役所
協力　廿日市市

参加費無料
申込方法は裏面を
ご覧ください

佐伯区団地元気フォーラム参加メンバー

土居河　博	（杉並台団地）
平岡　忠	（杉並台団地）
小﨑芳人	（藤の木団地）
雨瀧弘和	（彩が丘団地）
田中敏彦	（五月が丘団地）
迫　敬子	（五月が丘団地）
金藤八重子	（五月が丘団地）
中本紀明	（五月が丘団地）
竹林信昭	（美鈴が丘団地）
廣畑村夫	（美鈴が丘団地）
森保洋之	（美鈴が丘団地）
清水　宏	（薬師が丘団地）
吉野仁美	（薬師が丘団地）
佐藤　誠	（東観音台団地）
中倉　勇	（東観音台団地）
樋口竜大	（東観音台団地）
吉田一男	（東観音台団地）
徳原洋造	（東観音台団地）
岩成　徹	（東観音台団地）
岩成　恵	（東観音台団地）
倉重吉範	（東観音台団地）
中田勝博	（月見台団地）
大保　明	（月見台団地）
河井裕子	（ら・ふぃっとＨＯＵＳＥ運営委員会）
宮本暁子	（広島郊外住宅団地ネットワーク）
林　裕	（広島郊外住宅団地ネットワーク）
筒井康之	（広島郊外住宅団地ネットワーク）
猪木茂和	（広島郊外住宅団地ネットワーク）
宮本　茂	（広島郊外住宅団地ネットワーク）
平野吉信	（広島郊外住宅団地ネットワーク）
小林文香	（広島郊外住宅団地ネットワーク）

（オブザーバー）
廿日市市役所経営政策課、地域政策課

（平成２７年３月現在　敬称略　順不同）

発行 佐伯区役所市民部地域起こし推進課
広島市佐伯区海老園二丁目５番２８号
電話 082-943-9705 ＦＡＸ 082-943-9718
e-mail sa-chiiki@city.hiroshima.lg.jp
平成 27 年 (2015年) 3 月 広 V2-2014-570